

高齢者紙芝居から

はじまりは

20年前、市内のとある隣保館では、同和地区の高齢者の方々の体験をひとつの形にまとめる取組が行われていました。そして、その中で完成したのが高齢者による紙芝居でした。

※識字をテーマにしたこの紙芝居は、台本に書かれた台詞を読むものであり、差別によって文字の読み書きが難しい状況に追い込まれた高齢者にとっては、大変な困難を伴う取組でありました。

しかしながらそれでもなお、高齢者は何度も何度も練習を繰り返しながら本番当日を迎えます。

その努力の原動力になっているものは、「差別をなくす仲間になってほしい」という願いを、見に来てくれた人たちに伝えたいという一心にほかなりません。

だからこそ、高齢者が心を込めて行うこの紙芝居は、上演のたびに参加者に感動を与え続けています。



新規採用職員研修にて

現在、この高齢者の紙芝居は、当事者に学ぶことを目的とした筑紫野市役所の新規採用職員研修において行われ

※識字とは、部落差別によって学ぶ機会が奪われた「文字」を習得することから始まった取組。現在は、部落差別をなくすための学習が様々な形で行われています。

るようになり、研修に欠かせないものになっています。緊張のために声が震えたり、感極まって涙があふれたりする高齢者の姿を目の当たりにしながら、紙芝居と真剣に向き合った新規採用職員は、次のようなメッセージを高齢者に書いてくれました。

学びを实践に

実際に差別を受けてこられた方達の声を聞き、差別の辛さが伝わってきました。他人事としてではなく、自分たちが差別をなくす行動をしていくことの重要性を感じました。学校に行けず、文字が書けないがために、仕事を転々として今でも苦しんでいる方がいると知り、表面的には差別意識は見えなくても、今も残る部落差別に気が付かされた気がします。

(Yさん)



どこか他人事のように考えていて部落差別が今も続いていると思っていませんでした。部落差別を受けてきた方たちが紙芝居で同和問題のことを話してくれた時に、泣いている方がいて部落差別の苦しみはずっと心に残ることを知りました。

学んだこと、思ったことを周りの人に伝えていき、部落差別のことをたくさんの人に知ってもらい部落差別をなくす人をなくしていきたいです。

(Tさん)



本来あり得ないことが、実際にはまだこの時代になっても起こっていることに憤りを感じ、行政職員として、一個人としてもこの同和問題に関わり解消していかなくてはならないと思いました。そのためにも、普段から人権問題に関心をもって業務に携わり、人権感覚をもって市民の方と接していこうと思います。

(Yさん)



当事者との出会いを通して、新規採用職員は、今も残る部落差別を肌で感じ、その解消の主体者として何ができるかを考え始めています。

その姿は私たちに、当事者によりそつことの大切さと、それが人権尊重のまちづくりの根幹になることを教えてくれています。